Ｒ４．４．１５
第３号
通巻 155 号

学院通信

発　行
金光教学院
719-0111
岡山県浅口市
金光町大谷 1486
TEL(0865)42-3115
FAX(0865)42-3114

学院・春季霊祭

祈って伺う授業

学院長　高橋　寛志

本日、令和三年度本科卒業証書授与式を迎えることができました。卒業生はそれぞれ教師任命を願い出、教主金光様からご任命いただければ、金光教教師として御用に立つこととなります。その時、大切になるのは、神様と対話していく姿勢だと思います。実際に対話ができなくても、神様に問いかけて、答えを待つ姿勢が大切です。神様に問いかけた時、すぐ答えを下さらないかもしれません。しかし、時を置いて、他の人の口を通して答えて下さるかもしれません。あるいは、読み物を通して答えて下さるかもしれません。また、ふと思わせられるかもしれません。そこには、自分の思いのようであっても、神様の御思いが入っていると思います。

これからは、どうしたら良いのか分からないことにも多く出遭うことでしょう。その時、神様に心を向け、お伺いしてから決めることが大切なのです。学院では、授業を通して教祖様の御教えを学び、こういう場合は、どのように考えたらいいかという方向性は教えてもらいます。しかし、実際は、その時々で答えが違うことはよくあることです。その人に応じて、その時の状況に応じて、答えなければなりません。

今年もコロナ禍のため、一月にも座学での授業を執り行うこととなり、私は本教概説の授業の中で、祈って神様にお伺いをする授業を取り入れました。なぜそういうことをしたのかというと、自分で考えるのではなく、神様に思わせられる稽古が必要だと思ったからです。そして、そのことを、日常的に習慣づけるためのきっかけが大切だと思ったからです。最初は、授業などで、やらされるような形でも、だんだんにできていけばいいと思うのです。その最初のきっかけになればいいと思ってさせていただきましたが、今年度は、求道の日などを含め、何度かその取り組みをする機会を得ることができました。カリキュラムという形ですが、何度か繰り返すことで、それぞれの祈りが深まることとなったと思います。祈って伺う授業のような取り組みが学院で定着するように、そして学院生にも、その姿勢が定着するように祈っています。

ご卒業おめでとう
先輩諸師からのことば

どこへ行っても神様の御用

広島県・府中教会長
宮本保雄師

皆さん、卒業おめでとうございます。

皆さんの多くは、まず在籍教会で、学院修行の成果を大いに発揮されることだと思います。

私は現在、広島県の府中教会で御用させていただいていますが、元は熊本県の坪井教会の在籍教師でした。そして、いずれは私が坪井教会を後継するものと誰もが思っていました。

府中教会は母の里で、祖母が教会長として御用していました。高齢になって後継者を決めておきたいとなったとき、後継を期待していた者が、自分には教師は向かないと断ってきましたので、父に相談がありました。当時男兄弟で教師は私だけだったことや、私が祭典時など手伝いに行っていたことなどから、私が府中教会で御用をすることになりました。そのとき父から言われたことは、「どこに行っても神様の御用に変わりないから」ということでした。それを聞いて、私は、いつしか「在籍教会の教師」になっていたのではと思いました。もちろん在籍教会の御用も大切なことですが、「道の教師」として大きな心、広い視野を持つことも大切なことと思います。

皆さんの中には、後継や結婚、新規布教などで他の地へ行かれる方もあると思います。どこへ行っても「お道の教師」としての自覚を持ち、御神願成就のお役に立って頂きたいと思います。

求道の日（夕参拝）

教師としての四つの条件

大阪府・玉水教会長
湯川正夫師

信心には四つの目的があると教えていただいております。第一は「常に心を清らかに持たせていただくために」第二は「角立つ心を丸くするために」第三は「災いを転じて仕合わせにさしていただくために」第四は「自分の役割を明らかにして責任を果たさせていただくために」という四つです。御用をする内に、この四つの目的は、教師としての条件でもあると気付かせていただきました。

きれいな心、丸い心でないと人のことを祈ることは出来ません。また、自分や周りの人にどんな難儀が起ころうとも、先々必ずおかげにして下さるという強い信念で、神さまに向かわねばなりません。そして、皆さんは、卒業後それぞれの場で、それぞれの立場で様々な御用に当たることになりますが、すべての御用には神様・親先生の願いが込められています。その願い（自分の役割）をはっきりさせ、神さまの前立ち、教祖の手代わりとして、教師としての道を立て通して行かれることを期待いたします。

とは言え、皆さんは、この一年で僅かの肥料を与えていただいた段階で、教師として芽を出すにはまだまだ年月が必要だと思います。どうかどこまでも謙虚な心を持ち、焦らずに楽しく御用に励んでください。ご卒業おめでとうございます。

お道の教師として

令和二年度卒業生
大阪府・真砂教会
福嶋光輝師

ご卒業おめでとうございます。

十一か月にわたる学院での修行を終えられ、人を助けるお道の御用を一緒にさせていただけるようになることを嬉しく思います。

新型コロナウイルスの流行も収束の兆しが見えない中で、二月末からロシアのウクライナ侵攻が始まり、世界は混沌としてきています。

教祖様のお生まれになった幕末も世界は帝国主義の時代であり、その荒波に巻き込まれるように日本でも国家の体制や価値観が大きく変わっていく、混迷を極めた時代でした。「世が開けるというけれども、開けるのではなし。めげるのぞ。そこで、金光が世界を助けに出たのぞ」の御教えに見られるように混沌とした時代に人々を助けるために教祖様はお生まれになった訳です。

この再び混沌としていく時代に私たちが人を助けるこのお道の教師として御用に立たせていただくことはとても意味のあることのように思います。

この時代に生まれ、教師としてお取立ていただくことはどういうことなのかを求め、難儀な人々の助かりを祈り、取次ぎ助けることのできるお徳を、それぞれ在籍教会や御用場所での修行、社会や家庭での修行を通じて頂いて行くことができるように、共々におかげを頂いて参りましょう。

「神様と二人三脚」

令和二年度卒業生
和歌山県・
和歌山教会
澤井　薫師

ご卒業おめでとうございます。みなさんと一緒に過ごした信行輔導期間から、私は縁あってみなさんとお会いする機会が度々ありましたが、会う度にたくましくなっていく顔つきにワクワクしておりました。

学院卒業後、それぞれの持ち場立場で神様の御用をいただきますが、楽しみにして胸を躍らせている方、自分にできるのか不安な方、様々かと思われます。

どの先生からも言われているかもしれませんが、「学院卒業」は終わりではなく「金光教の教師」として一つの始まりです。そのスタートに立ち、みなさんはこれから神様と共に二人三脚で駆け抜けていきます。時には思いがけないことで躓くようなこと、自分の思うようにいかなくて諦めたいと思うようなことがあると思います。しかし、私たちは誰よりも神様に近い立場でいるのですから、「神様を杖について」踏ん張って、限りなく前に、一歩一歩進むことが大切だと、私自身も教師になってから感じさせていただいております。どうぞ、わが心が育つような信心辛抱のおかげをいただき、貴方らしさで御用魂を輝かせて下さい！また一緒に御用させていただく日を楽しみにしております。

講堂障子張り

係別作業
（教材係）

日程

（冬期在籍教会実習後から卒業まで）

12月
29　帰院式
30　大掃除
31～1/3　年頭御用奉仕

1月
5　第六回　求道の日
5～12　実践課題設定週間
8　教話実習②
13 14　教典研究発表

2月
1　第七回　求道の日
7 8　第三回　定期考査
14～19　礼典実習
24　教話実習③

3月
1　第八回　求道の日
6～8　第三回修徳殿入殿・女子
14～16　第三回修徳殿入殿・男子
25　学院・春季霊祭
26　第三信心レポート懇談
31～4/11　天地金乃神大祭御用奉仕

4月
12　学院・天地金乃神大祭
13 14　大掃除・身辺整理
15　卒業証書授与式

学院生活を振り返って 学院生の声！

有意義な学院寮での生活

岡山県・里庄教会
赤澤　高

私は、これまでの人生で、非常に厳しい長期間の団体生活を経験してきました。そこで、何が大切であるかを理解し、それが身に刻み込まれています。ですので、学院に入学し、寮生活を送る上で、精神的・身体的にも、何も不自由は、感じることなく過ごすことができました。毎日がとても楽しく、有意義でした。

快適な寮生活を送るには、寮の様々な規則を遵守し、規則正しい、活々とした生活を、日々送ることで、まずは、自分自身を鍛え上げることが大切であると改めて学びました。また、寮生活では、同期生と、常に語り合うことが大切です。時には、今までの生活習慣の違いや考え方の違いから、様々な問題が生じることもあります。そういう時こそ、志を同じくした者同士が、道の教師としての生き方と素養を身につけるという目的に向かって、頑張っていかねばならないとの自覚のもと、常に、人を思いやって生活することが大切であると、心底から、学びました。

一年間、学院生として過ごしてきましたが、今一度、自分自身を見つめ直し、さらに飛躍をしていきたいと願っています。

神と人　人と人

岡山県・児島赤崎教会
藤井　厚宜

私は、以前から人を助けるということを実践してきたつもりでしたが、学院で修行をする中で、私の人を助けたいという思いは、人心だったと気づきました。人に喜んでもらいたいと思っていても、自分が困った時には手を貸してもらいたいと見返りを求めていて、そうならないと不足に思っていました。結局は自分の都合でしか人のことを思えていなかったのです。

天地書附の中には「おかげは和賀心にあり」と書かれてあります。おかげは和らぎ賀ぶ心にあると教えていただいています。ところが私は、和賀心になっておらず、せっかく人に喜んでもらうようなことをしても、おかげにつながらなかったのだと思います。

そのことに気づかせていただいて、私は、人が助かっていくには、こちらが神心にならせてもらうことが大切だと思うようになりました。神様は、人を見捨てることはなく、人に見返りを求めることなく、大きな心でいつまでも見守っていてくださっています。そんな「天地日月の心」が神心ではないかと今は思っています。

なんでも有難いと思える、全てを喜んでお礼が言える、人の喜びを自分の喜びとできる、教祖様のような寛大で大きな器をもった教師になりたいと願っています。

神様に心を向けながらの学院生活

大阪府・堺教会
白神　吉江

私は、教会で育ちながらも、金光教のことをほとんど分かっていませんでした。ですので、楽しみと共に沢山の心配と不安を抱えながら学院に入学させていただきました。

「学院生活の願い」に、「人間のあらゆる問題をみていく眼をひらき、そこに道の働きが現れていく生き方を求めさせて頂くものである」とあります。十人十色の学院生、皆それぞれに大切にしているもの、感じる事、考えも全然違います。それぞれに悩み、考え、その時々に「神様に心を向ける事」を学びました。

先生方から沢山学ばせていただいたこと、寄り添って下さったことや、学院生同士で、互いに思いやり、時には意見し合ったこともありましたが、全て「人が助かる」働きの一つだと思います。私達はこの一年間で「人が助かる」ことを具体的に学ばせていただき、有難く思っております。私自身も、他

人も全て神様にとって大切な氏子で、皆の幸せを願って下さっている事を強く感じる一年でした。

信心、信仰というものが、様々な問題が起きている現代を生きる人々にとって必要なものなのだと改めて思わせていただきました。一年の学院修行を終え、これから少しでも多くの方の助かりと立ち行きを願い、共に歩ませていただく御用に使っていただきたいと願っています。

スマホを放して見つけた幸せ

滋賀県・湖北教会　井上　幸

神様って何？両親はなぜ真剣に手を合わせているの？入学当初はそこからのスタートでした。私は、自分にとって都合が悪いと、不満や不足を抱いてしまう自分が嫌で、変わりたいと思っていました。そんな時、父が「学院に行ったら絶対変われるよ。お父さんも変わったから」と言ってくれ、それを信じて学院に入学することを決めました。

「変わりたい」という一心で、今日まで学院のカリキュラムに身を任せて、修行に取り組んでいきました。始めは、辛さや不足ばかりが出てきましたが、そんな気持ちを持っていても、段々と天地のお恵みを実感することができました。そして、神様の御都合、御思いに沿う生き方が幸せへの近道だと気づきました。

学院には、スマートフォンを持ち込めないので、肌身離さず持ち歩いていたスマホを教会に置いてきました。スマホを手放して見えたのは、今までスマホの画面で遮られて気づかなかった、私を支えてくれている沢山の人や物、受け通しである天地のお恵み、そして両親の祈りでした。それらの支えによって生かされているということに気づかせていただき、小さな喜びに目を向けていくことができるようになりました。

沢山の支えがある中で土台にあるのは、やはり両親の祈りです。両親の祈りがあるおかげで、今の自分を頂けている。そのことに気づいた今、私は、お礼を土台とした信心の心を肌身離さず持ち歩き、どこまでも親孝行を中心として、神様に助けてもらいながら生きていきたいです。学院で、私の一番の幸せを見つけさせてもらいました。

ここまでの歩み

■第六・七・八回「求道の日」

学院生活の基本に立ち返り、自己の信心を正していくことを願い、原則として月の朔日を「求道の日」と定め、一日のはじめに教主金光様のお出ましを迎えさせていただき、終日黒衣で過ごし、講話、共励、覚筆写、徒歩行等を実施している。

第六回は、覚筆写と、冬期在籍教会実習の内容をもとにした個別懇談を行った。第七回は、午前中、「回生の冒険者　崔宰漢」を鑑賞し、午後からは、本部広前で神習を三十分行った。第八回は、「金光さま―とりつぎ物語」及び、続「金光さま―とりつぎ物語」を鑑賞し、学院広前で、学院長の先唱で祈って伺う御祈念を行った。

それぞれに、学院生活の基本に立ち返って取り組め、ありがたかった。

■教話実習

教話実習では、教師の素養の一つである教話の力を身につけることを願いとしている。教会で、広く信奉者対象に教話することを想定し、聞き手は学院生であるが、学院生を対象とした話にならないように、それぞれが教話の原稿を作成した。グループに分かれて実習を行い、教話実習後は、グループごとに検討しあった。第二回の教話実習後は、その内容を、懇談、検討して改稿・清書し、グループを変えて、第二回とは違ったメンバーで第三回目の教話実習に挑んだ。回を重ねるごとに、聞き手にどうやったら伝わるかという工夫が見られた。卒業後の御用の上で、教話実習での学びが活かされることを願っている。

第２回教話実習

■礼典実習

礼典実習では、「祭式」及び「祭詞」の授業で習得した基礎的内容をもとに、葬儀式、五十日祭並びに合祀祭、結婚式、地鎮祭の各諸祭を、乾物、野菜、果物などを調饌し、実際に祭服を着て祭員を務め、本番に近い形で執り行った。学院生全員がいずれかの諸祭で祭主を務め、自らが起草、浄書した祭詞を奏上する貴重な機会ともなった。昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染防止のため、一月に他宗教研修や選択別研修が実施できず、院内で授業を実施したため、「祭式」と「祭詞」の基礎的部分を理解し、基本作法をしっかりと身につけているものが多く、各諸祭の意味合いや次第の確認に重点を置くことができた。また、実際の設えを時間内に皆で分担して調える中で、少しでも良い祭典となるよう心を配る姿が見られた。在籍外教会実習も実施できないことから、この学びを現場での御用の中で活かしていくのは、卒業後となるが、それぞれのところで、真剣に取り組めたことがありがたかった。

礼典実習・結婚式

礼典実習・告別式

■修徳殿入殿

第一回（九月）、第二回（十二月）の入殿を受け、第三回入殿は、「学院卒業を間近に控え、お道の教師にお取り立てを願おうとする者としての御用のあり方や決意などを改めて自覚する」という願いのもと実施した。輔導・副輔導の教導をいただき、また、修徳殿という場のはたらきの中で、より深く自己を見つめる機会となった。特に、今回の入殿は、今までよりも一日長い二泊三日型の入殿であり、その中で、卒業後の自身のあり方について、新たな気付きやここから取り組むべき課題等を確認できる機会となった。

■学院春季霊祭・天地金乃神大祭

本部広前のご比礼を受け、学院広前において、三月二十五日に春季霊祭、四月十二日に天地金乃神大祭が執り行われた。

これらの祭典は、神様と学院霊舎に祀られる物故職員と学院生を合わせて二百二十四柱の霊神様のお働きを受け、ここまでの学院修行を進められてきたことへのお礼と真心を現す祭典として奉仕される。

祭典に臨むにあたり、祭員や祭詞の起草・浄書、神饌物の調饌、奏楽、祭服の着付け等、学院生全員が分担して御用にあたった。学院生達は、真心をお供えさせていただこうと、実意を込めて御用に取り組んだ。その姿勢は、神様、霊様の喜ばれるお供えとなったであろう。御用を通し、それぞれが、入学以来ここまでお育ていただいたことへのお礼と、ここから先のそれぞれの御用成就をお願いさせていただいた。

学院・春季霊祭